



ア
カ
ネ
ズ
ズ
ズ

◆第二章

彼に連れられ、足を踏み入れたのは、ホテルの一室を思わせる部屋だった。

広大ということはないものの、バーの奥にある部屋として考えれば不自然なほどに広い。以前、海外製のアロマキャンドルを炊いたときに感じたことのある、バニラのような甘い香気が部屋の中には漂っていた。素面の状態だと、軽く噓せ返ってしまいそうになるその匂いも、アルコールによって酩酊した思考は不思議と不快に感じなかった。

最も目を引くのは、壁際に設置された寝台だ。大人が二、三人余裕で寝られるそのサイズは部屋そのものの広さを考えれば、大きすぎると言えた。

「ほら、立ってるの辛いんじゃない？ 横になろっか」

「え……あ、えっと……」

明確な答えを出すよりも早く、彼の遅い腕が、あかねを抱き上げた。

物語の中のお姫様のように、寝台の上に優しく下ろされる。

ぎい、と。マットレスのスプリングが小さく軋む音。

(なんだか、この部屋……ラブホテル、みたい……)

あかねの頭の中で、そんな連想が成される。

もちろんあかねはラブホテルなど行ったことはない。だが役作りのために、どのような構造なのかを調べたことはあった。

この部屋の配置や内装は、それらによく似ていた。

「大丈夫？」

彼の、氣遣いの声があかねの鼓膜を揺らす。その瞳から、目が逸らせない。

口の中には、フルーティな酒の香気と、彼の唾液の味がうつつすらと残っていた。

次から次へ、いくらでも溢れてくる、あかね自身の唾液で薄まったそれを——こくり、と呑み下す。喉が焼けるように熱かった。

否、違う。熱いのは、あかねの身体の、奥の方だった。

顔面が、身体が、子宮が、熱い。

スカートの奥で、ぐつぐつと沸き立った溶岩のような感情の花蜜が滴っていく。

触れたかった。いや違う。触れてほしかった。

絡め合った舌の感触が、脳内をリフレインする。ほんの数分前のことなのに、もう恋しくてたまらなかった。

服の下、ブラの下でも、自分自身の先端が硬くなっているのがわかる。普段は気にすることのないのに、少し身じろぎした程度で、声が出てしまいそうな甘い疼きが生まれる。

訴えるように、ねだるように、潤んだ瞳が男を見つめる。

（——抱いて、ほしい）

あかねの身体が——そして心が、彼を求めていた。だが、アルコールによって理性を希釈されてなお、あかねの生真面目な潔癖さがそれを口にするのを妨げていた。

「どうかした？」

ニヤつく男の表情に、酔いのまわった今のあかねは気付けない。視線が、男の顔立ちを、輪郭を追い、鼻筋を見つめ、目元や、口元の造形をなぞる。魔法にでもかけられたように、あかねは男に惚れていた。

息を吸うと、彼の匂いがある。控えめな香水と煙草の匂い、その奥に混じった、男性の汗の匂い。それらが疼きと結びついてゆく。

自分からそんなことを言うなんて、はしたない。

そんな気持ちが消えたわけではない。しかしもう、あかねの我慢は限界だった。スカートの下で、ふともも同士が擦れる。くちゅ、と、小さな、しかし卑猥な音が響く。

それが引き金だった。

「あ、あのっ……」

思わず大きなものとなったあかねの声に、男の頬がいやらしく緩む。

ほんの一瞬。優しげな男性の仮面の奥の野獣の欲望が姿を見せて、すぐに引込んだ。

あかねの瞳に映るのは、そんな仮面だけだった。

「言ってみて。なんだって相談に乗るって言っただろ？」

「私……あなたのこと、好き……なんです。だからっ——」

男の、心配げだった表情が、驚きに変わる。

「抱いて、くれませんか……?」

